

# 高山

高山の原生林を守る会

会報 第 34 号

2000 年 10 月



## 西大巔清掃登山

8月27日に西大巔清掃登山を行いました。当初は天元台から梵天岩を中心とする清掃登山を予定していましたが、この時期の西吾妻山は集団登山が多いことから、登山道への負荷を考慮し、登山者が比較的少ないテコ平から西大巔へのコースに変更しました。しかし、これもあまり、意味のない配慮であったことを当日、思い知らされる事となってしまいました。

まず、ゴンドラ終点駅で、独立樹化したブナの木とその周辺の植生環境の変化について観察をして、出発しました。スキー場と平行する登山道に入ると間もなく、岩を抱いたシナノキの大木が現れ、周辺はブナの中木やツリバナが取り囲み、スキー場が切られる前のブナ林の面影を忍ばせています。しかし、視界からはスキー場が針葉樹林帯に入っても暫くは消えることはありませんでした。オオシラビソの株元にアリドオシランの花を見る辺りからようやく、手つかずの針葉樹林帯となり、登山道も岩肌が剥き出しの険しい様相を見せます。

下山者から福島交通のツアー登山で120名以上の集団がこのコースを登山中という思いがけない情報もたらされました。偽ピーク手前でこの集団とすれ違った際に、この集団のサポートに清掃登山の趣旨を説明したのが効いたのか、登山中にチェックしておいた大きなゴミはあらかじめ下山時にはなくなっていました。3時間近くかけて辿り着いた頂上付近は、ミヤマコゴメグサ、ナンブタカネアザミ、タカネアオヤギソウ、ハクサンフウロ、ミヤマリンドウ等が往く夏を惜しむかのように咲き残る中、エゾオヤマリンドウ、ウメバチソウが咲き始めていました。西吾妻方面を望むと、一瞬、裸地化した登山道のシルエットと先ほどの集団登山の一行がオーバーラップしたように感じました。

### 1. スキー場に残されたブナの木

グランデコススキー場のゴンドラ山頂駅は、夏の草むらが生え茂り、スキー場の急斜面に点在して残されているブナの木々が目に入る。ところが、いずれのブナの木々も稍から枯れ枝が広がっているのではないか、スキー場開発に当たり、景観保持のためか、自然環境を残す心情か、群生した広葉樹林を無視した開発を目前に、参加者の心の痛みを感じる。前回の観察会の報告で、村松さんがブナの樹林、凛々としたブナの大樹に歓声を上げた新緑と自然の雄大さに比較すると、環境破壊の現況をしっかりと確認できたことは、環境保全を目的にしている本会の学習が十分に達成したようなものでした。

### 2. 幼稚園児君の頑張り

西大巔 1981m を目指す登山道は、行程約 3500m、高低差 590m は厳しい登りの連続であった。今回は、参加者の班編成はなく、子供 3 名(男子 1 名・女子 2 名)のグループ。途中、休憩時に男の子に小学校学年を尋ねると、幼稚園児だと告げられてビックリする。登山道は急峻な登りで大きな石が重なり大人でもかなり歩幅を広げても大変な道である。これを、園児君の目線では巨大な岩壁に挑戦ではないかと考える。しかし、この登山には子供の体力を十分に勘案した親心に、ライオンの子育てが思い出される。お陰で園児君のパワーを頂いての西大巔頂上で清々しい空気に接し、流れる汗が喜びに変じました。(園児君が父親のリュックの上でほほえんだ姿のシャッターチャンスを逸したことは残念でした。)

### 3. 自然が育てる

登山道での小休止のとき、女の子が「人間はみんな自然から生まれたんだよね。」と話す周囲は緑一色である。私は心の中で「そうだね。」と答えた。それは、葉っぱのフレディの話しを思い出したからであった。葉っぱのフレディは、春に生まれいろいろな体験を重ね「命の旅」をしながら木枯らしの吹く寒い日に生まれ育った枝に別れを告げ、土に帰っていく物語でした。この話は、人の死を子供達に寂しいものではなく自然なものであることを教えているものです。多分この子もこの話を知っているんだと、緑の木々に一層の新鮮さを味わいました。

西大巔山頂に咲いていた青いリンドウ、白いウメバチソウの花々と園児君・2 名の女の子そしてリーダーの方々、参加した皆さんと一緒に流した汗と、下り道のスベリに注意した足跡を残し思い出が一杯できたことに感謝します。

西大巔に登るのも「高山の原生林を守る」会の自然観察会に参加するのも初めてだったので、集合前は少しどきどき。五色沼自然教室前から乗り合わせでグランデコススキー場へ向かい、ゴンドラを降りて歩き始めたのは 10 時。スキー場を抜けて登山道へ。しばらくはスキー場の脇を歩きました。林の中を歩くので濡れるのを覚悟していたけれど、8 月中旬以降雨が少なかったせいか登山道は比較的乾いていて思ったより歩きやすかった。時期的に花の種類は余り多くなかったが、アリドオシランと黒い実のタケシマランが見つかったのが印象深かった。当日は清掃登山のためゴミを見つけると帰りに拾って帰ろうと登山道の間に出しながら歩きました。この日は福島交通で天元台からデコ平に抜ける西吾妻登山ツアーがあったのでどこですれ違うのかと想像していたら、西大巔山頂まで 30 分ほどのところで鉢合わせ。すれ違うのに時間がかかったので山頂についたのは先頭より 30 分以上遅れてしまいました。

山頂付近ではミヤマリンドウやウメバチソウなどがみられました。西大巔から西吾妻を見ると登山道が広がって裸地化しているのがわかります。このままでは裸地化がすすむ一方になるのではと不安になるほど。登山道の周辺の裸地化について考えさせられました。

## 西大巔周辺誘導ロープ補修作業の報告

高橋 淳一

登山ブームによる大量入山は、各地の山域で様々な問題に直面している。吾妻連峰でも例外に漏れず、アクセスの便利な浄土平周辺や山頂付近までスキーリフトが延びる西吾妻山には、夏から秋の登山シーズン中に多くの登山者が訪れ、その結果、東吾妻山頂や人形石、いろは沼、弥平平などでは裸地化が深刻な状況となってしまった。これらを背景に平成8年度より、「緑のダイヤモンド計画」(環境庁、福島県、山形県)による保全、復元作業が行なわれている。一方この復元事業から外れた、西吾妻小屋、西大巔間には米沢市と地元山岳会によって数年前から誘導ロープが設置されている。

しかし、例年積雪により損傷し機能しない状況となっており、去る9月3日、関係者(環境庁、設置者)の承諾を頂き補修作業を行なった。当日は、朝から雨模様という悪コンディションの中、グランデコススキー場から幹事の佐藤氏と2時間半余(期待のゴンドラは8月末で運行終了)の歩行をへて現地に到着、作業に取り掛った。作業は雪の重みで折れ曲がった鉄杭の修正を行ない、再度打込んでから、ロープを張り直すという順序で3時間余りを費やし、最小限の補修を終えた。しかし、毎年必要となる作業を考慮すると、今後は環境庁、地元市町村そしてゴンドラを運行するグランデコ、天元台両スキー場関係者による組織的な体制が必要であるとともに、本格的な復元作業の実施が不可欠であることを実感した。

## 第21回東北自然保護の集い・鱒ヶ沢大会報告(1)

期日:2000.10.14~10.15 場所:青森県鱒ヶ沢町 日本海拠点館

シンポジウム「21世紀－白神と東北ブナ林の未来」

**出席者:** 吉田正人(日本自然保護協会)、鬼頭秀一(東京農大教授)、奥村清明(秋田自然保護連合)

吉川隆(赤石川を守る会)、内山節(哲学者)、村田孝嗣(コーディネーター)

**村田:** 前の山形・秋田の2回の集会を経て、今回は議論を深めて、方向性を出したい。

**内山:** 人間の関わりを絶った使えない文化財は承服できない。モヌケノ空では意味がない。人との関わりを持って初めて文化だ。人を排除したやりかたには賛成し兼ねる。

**吉田:** 1985年のブナシンポジウムでは「ブナ帯文化」がテーマであった。白神のブナが守られたのも全国的に「ブナ原生林の価値」が認められたことによる。世界遺産に指定された以前は保護協会は「何らかの規制が必要」とコメントした。しかし時代は変わりつつある。国際自然保護連合の話し合いでは、広い視野で、繋がりを持って保護を考える。聖なる土地から人が住んでいる広い空間で考える、が世界の流れ。自然と人間と文化(MMCアプローチ)とを一体で考えることが、自然である。

**鬼頭:** 聖域(サンクチュアリ)といった自然を囲い込んで保護するという考えは確かにあった。今の時代は自然と人間の関わりの中で保護することが必要だ。MAB計画のように、ゾーニングで決めることでは無いだろう。入山禁止の代用でお金で解決すれば、村の文化は失われてしまう。田舎の方は素直で「お上」の話はそれに従ってしまうが、それが文化の喪失につながる。入山規制がいいなら、それを決めるプロセスに全員が参加しなければならない。今の行政機構は「お上が決める」(パターンナリズム)がほとんど。この白神もそうだ。ここに今の混乱がある。

**奥村:** 反対運動の先頭を走っていた人は何らかの形で「血」を流していた。自分のフィールドを失った者(青森)とそうでないモノ(秋田)の違いがあったように思う。入山規制の中に「一切人を入れない」という一文があったことは事実。世界遺産指定時に秋田県側で開かれた公聴会では「全員が入山規制」に対して反対は無かった。秋田県側の規制は、意見合意が出てくれれば、変更してもいいだろう。栗駒山は、コアに登山道があり人が入ることに違和感がない。白神入山規制に対しては、青森のような熱い思いはない。

**吉川:** 地元が入れない入山規制は止めたい。従来の通り自由に山に入りたい。地域住民の意思を反映する場がない。白神で生活に利用して恩恵を受けていた住民に対しての権利や管理の姿を議論して欲しい。いつも議論が出てこない。奥赤石林道は自由に走りたい。(今は閉ざされている)

**鬼頭:** 地域の人たちに敬意を持って、地域の人々の関わり方を考える。地域の人を外しての議論はありえない。しかも地元から、その答えを出していく必要がある。

**奥村:** 林野庁の森林生態系保護地域の管理計画が、世界遺産のベースになっている。我々自然保護団体がそれを変えるのであれば、林野庁との交渉となるだろう。貴重なブナ林を保護するには入山はどうあるべきか、という視点での議論が必要。しかし秋田県側での議論は必要ないだろう。

**村田:** 入山の規制と緩和という対立で考えるのではなく、モニタリングが必要だと言っていた。

**鬼頭:** 保護団体で大きな差があるとは思えない。今後、林野庁主導ではなく、自然保護団体主導で進められるだろう。入山規制は自分で決めることが大事。青秋林道の車両規制などを具体的に考え、提言すべきだ。

**奥村:** 共同歩調を取ることはやぶさかでない。共通なテーマはあるが、入山規制に対してはここ2~3年は考えない。

**弁護士:** 規制は外すべきだろう。しかし林道規制が条件だ。地元の権利に対しては、その範囲は昔に戻る(林道開削以前)ことが必要。権利は川の流域単位で考える必要がある。

**村田:** 白神では、広く、色々な人が自然に触られること、素晴らしさを共有できることを権利と考えたい。建設的な意見が多く出されたことに感謝。コアの外も含めて考えたい。今後、行政を含めて大いに議論が必要であると考え。

(記録:奥田、編集:佐藤)

## 吾妻・安達太良花紀行9 佐藤 守

クロクモソウ(*Saxifraga fusca* ユキノシタ科ユキノシタ属)

山地の溪流沿いの岩上や湿地に植生する多年草。葉は円形でユキノシタの仲間特有の端正な鋸歯で縁取られる。葉の表面は光沢があり、白毛が散生する。叢状の根生葉の基部から花茎を伸ばし、円錐花序の小花を咲かせる。小花の花弁数は5枚で赤茶色とも赤紫ともつかない微妙な紫系の色。雄ずいは10本。雌ずいの先端部は2つに分かれる。盛夏のある日、それまで冬しか訪れたことの無かった吾妻山の登山ルートを踏査した。冬の登山では必ず休憩を取るキタゴヨウマツ林の沢で、初めてこの花に出会った。葉の形状から、ダイヤモンドソウかと思ったが、丁度、開花期に当たり、花を確認できたのが幸いした。私はその花を一見して、ヒメアオキの花に似ていると思った。このような色合いの紫系の花は吾妻・安達太良山域ではこの2種とハウチワカエデ、アケビ、マキノスミレぐらいで多くはないが、日本人に好まれる色合いではないかと思う。クロクモソウ、ズダヤクシュ、タニギキョウ、ヤグルマソウ等の群落で被われたこの沢は冬のイメージからは想像もつかないほど植生豊かな、深山の夏沢であった。

ヒメアオキ(*Aucuba japonica* var. *borealis* ミズキ科アオキ属)

ミズナラ林やブナ林の林床に植生する常緑の小低木。雌雄異株で先端部の葉腋から花茎を立て円錐花序の小花を咲かせる。雄花の方が雌花より大きい。花弁数は4個で、雄花は雌ずいを欠き、雄ずい数4が基本。写真の花は、花弁数、雄ずい数が5でキメラ変異を起したものと見られる。4を基本とするミズキ科では珍しいのではないだろうか。ヒメアオキはエゾユズリハ、ハイヌガヤと並んで日本海側ブナ林に共通して植生する林床低木で、日本海型森林植生を構成する代表的な標徴種とされている。吾妻・安達太良のブナ林では、この他にツルシキミ、ヒメモチを加えた5種が基本的な林床樹木である。いずれも葉は革質であるが、ヒメアオキの葉は上位の数葉の先端部は粗い鋸歯で縁取られているので見分けがつく。

私が初めてヒメアオキの花を意識したのは、吾妻連峰生態系保護地域の線引きに備えた調査で、中吾妻の1211m峰を踏査した時である。小尾根をヤブこぎしながら、植生調査をしていて、林床下で紫色の花と赤い果実をつけたヒメアオキの雌株に遭遇した。雌花の柱頭は透明感のある青紫色で、小さいながらも穂状に散らばった小花は点描画を連想させた。

## 東北ブナ紀行(5) 奥田 博

3回に分けて6山を紹介した白神山地のブナも最終回で7山目となります。登山道のある山で出会うブナの一部は紹介できたと思いますが、白神にはまだまだ我々の知らないブナの森はたくさんある。特に沢筋には、たくさん見られます。この沢をたどるコースは、現在は原則として訪れることはできない。秋田県側は入山禁止、青森県側は届け出制で限定されたコースのみ可能なのです。この入山規制に関しては賛否両論があります。この10月にも、青森で開かれる「東北自然保護集会」のテーマとなりますので推移を見守ってください。

### 9)秋田県・小岳

小岳は秋田・青森県境に連なる白神山地の中央にある、目立たない名実共に小さな山である。この山へのアプローチは秋田の藤里町から延々と林道を1時間30分にわたって走り、やっと登山口へとたどりつく。そこはブナの森の真っ只中であるはずだが、周囲は伐採跡に植えられたスギも目立った。水場のある登山口から登山道を登ると、すぐにブナ林となる。このコースが開かれてまだ20年ほどのようだが、すっかり馴染んだ道の脇には原生的な雰囲気漂うブナの森が展開する。太いブナは少なく、ブナ純林でもない。ブナを主体に、ホオノキ、カエデ類、などが混じっている。このようなブナの中を歩いて、突然急坂となる。それを越えると、森林限界を越えて展望が得られる尾根となった。ここには日本最低標高(約950m)のハイマツが自生している。やがて到着した山頂か

らは、駒ヶ岳を初め、ニッ森、泊岳、遠く白神山や向白神など白神山地の大展望台であった。そしてどこまでも続くブナの森が印象的であった。

■(コースタイム)

登山口(80分)山頂(60分)登山口

10)青森県・大倉岳

大倉岳を知っている人は、相当の山のマニアである。津軽半島の根っこの近くに大倉岳はあるが、アプローチでは一切看板・道標の類がないので、登山口までたどり着くには苦勞する。何とかたどり着いた登山口には立派な案内板が建っていて、ここから山頂に向かって尾根をたどり、赤倉岳を経由して回遊するコースに入る。

最初の登りでは、ブナとアオモリヒバの混交林が現れる。登ると次第にブナ林となる。前岳手前の小屋を抜けると細いが見事なブナ林が現れる。前岳からいったん下り、再び登れば展望の大倉岳山頂であった。祠のある山頂からは日本海や陸奥湾が眺められた。山頂から少し戻り、赤倉岳への道に入ると、素晴らしいブナ林が現れた。特に、赤倉岳山頂の前後に現れるブナ林は、一定のリズムを感じる。標高700mに満たない場所でのブナであるが、立派なブナとしての風格を備えていた。ガイドブックのコースタイムよりも大幅に遅れて回遊コースを歩き終えた。

■(コースタイム)

登山口(1時間)六合目(40分)田代岳山頂(5分)田代湿原(1時間20分)登山口

森の素敵な仲間たち 野鳥シリーズ Vol.5 高橋 淳一

10月の声を聞けば、吾妻山や安達太良山では紅葉が見頃となるが、今年も高温の影響か昨年同様、青葉が目立つようである。2週間は遅れているだろう。この陽気のせい、冬場、低山や人里で暮す留鳥も下りるのをためらっているようで、亜高山帯の針葉樹林には、いまでも多くの鳴き声が響いている。また、南の国へ旅立っているはずの夏鳥の代表格、メボソムシクイのさえずりが聞かれる一方で、市街地でも観察出きる冬鳥のツグミがすでにブナ林に飛来している。昨今言われる温暖化の影響を受けて、自然に生きる野鳥達のライフスタイルにも変化を来しているのだろうか。それとも越冬地や繁殖地の森に異変が起きているのだろうか。

キクイタダキ(菊戴)スズメ目 ヒタキ科

日本で記録されている野鳥は、約550種とされているが、最も小さいのがこの鳥である。体長は10cmあまり、全身淡緑色で尾羽と翼がやや黒味を帯びている。さらに体重も6g前後と1円玉6個分程度であり、どんな体の構造なのかと興味を沸いてくる。夏場、針葉樹林で繁殖するが、晩秋にはシジュウカラなどのカラ類に混じり低山の松、杉林等へ移動してくる。リリリと、か細い声で鳴き



ながら枝先を動きまわり、小昆虫を捕食しているが、注意して見ないとなかなか見つからない。雌雄に共通する頭上の黄色い羽毛を「菊の花卉」に見たてて着けた名前には、良く観察したものだと感心するが、体が小さく虫のような鳴声から、子供のころは悪友達と勝手に「マツムシ」と命名し呼んでいた。

### ウソ(鶯)スズメ目 アトリ科

残雪の頃、針葉樹林の中をフィーフィーと笛を吹くような鳴声を発しながら、飛び回る鳥に出会うことがある。スズメよりやや大きめで、比較的小さなくちばしを持ち、雄は灰色、雌は褐色の羽毛につつまれている。また尾羽や風切羽そして頭部は黒く、雄は頬からのどにかけては鮮やか紅色である。

秋から春にかけては、低地や人里で越冬しているが、果樹や桜の冬芽を食べてしまうことから、害鳥扱いされる場合が多い。ある桜の名所では、対応策として「麻の実」の給餌台を設けたところ、食べ残して地上へ落下した実が発芽成長した結果、大麻(麻薬の原料)であったため、あわてて刈取りを行ったとのエピソードもある。しかし、そんな厄介物も神事の中では、厄払い用の木彫りとして一役買っているのはなんとも面白い。



(原図 小学館・野鳥図鑑)

### 写真展の御案内

東北山岳写真家集団写真展『それぞれの山』(東北百名山・福島展)

福島在住会員5人(若林健二、仁井田研一、渡辺徳仁、菅野寛一郎、奥田博)によるオリジナル作品「それぞれの山」を主体に「東北百名山」合わせて50点を展示。

1. 日時:2000年11月23日祝日(木)~11月26日(日) 9時~18時
2. 場所:福島テルサ4階ギャラリー (福島市上町4-25) 024-521-1500

### ◆次回観察会のお知らせ

#### 第44回自然観察会と総会

日時 11月26日(日) 8:00~16:00

集合場所:四季の里入口駐車場 集合時間:8:00 参加定員 観察会のみ30名

内容:午前中は、高湯温泉周辺の自然林の観察を行います。13:00からは「こぶし荘」で総会を行います。

準備するもの:登山靴、ゴム長靴等、雨具、防寒具、帽子、軍手等、昼食

温泉について:12:00~13:00までは昼食・温泉となりますが、「こぶし荘」は温泉がありませんので、「安達屋」さんなど最寄の旅館を利用することとします。

参加費用 保険代300円(当日:他に温泉入浴料 500円程度がかかります。)

申し込み 11月25日まで

【編集後記】■2001年須賀川市で開催される未来博のニュースや話題が、新聞、テレビを賑わすようになった。「森」や「自然との共生」をテーマとする博覧会だということで、各パビリオンの建築にも



ヨソノヒヨドリ大群落(テコ平スキー場)

自然素材の積極利用やリサイクルを検討するとのことだが、結果はいかに。また、「森」(雑木林)を造成しての会場跡地は宅地としてリサイクル？するという。一方、愛知万博は「海上の森」を保全しようとの市民の声により、「森」の改変は当初計画の100分の1以下に縮小し0.5ha程度に抑えられることになったという。当然、150haの宅地開発は白紙に。名古屋市と須賀川市、同じ「森」を舞台にした議論、テーマ、大都市と地方小都市の市民意識に隔たりがあるのは当然だが、そこに棲む野生動物たちの生きる権利や命の尊さに違いはあるのだろうか。■「カタクリの会」の瀬川強さんの提唱による「グリーンベルト構想」が東北森林管理局(旧青森・秋田両管林局)で「奥羽自然保護樹林帯」として策定されたのを契機に、林野庁では全国的展開を行なうことになった。福島県の国有林を管轄する関東森林管理局(旧前橋管林局)でも本年度中に南会津(只見町他)地域の策定を完了させるとのこと。また、「吾妻・飯豊」等、福島、山形両県境(東北森林管理局との隣接区間)についても平成13年度以降策定作業を予定とか。「蔵王-吾妻-安達太良・飯豊-朝日」をグリーンベルトとして結ぶことを願う「守る会」としても、積極的に提案して行きたい。■西大巔清掃登山のおり、テコ平スキー場を被うヨツバヒヨドリとハンゴンソウの大群落に驚いた。翌週、誘導ロープ補修のため再訪して、その原因を、思わぬところで知ることになった。詳細は次報で紹介したい。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第34号 2000年10月発行  
編集・発行：高山の原生林を守る会  
代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990(夜間7時～9時)  
郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」  
入会方法：年会費(500円)を添えて上記まで  
編 集：奥田・佐藤・阿部・丸山

---

● 基調講演：哲学者 内山 節「21世紀の展望－自然と人間、その現状と行方－」

---

－ 21世紀を考える

・百年を考えること、予測することは不可能。経済や技術の予測は困難だが、子供や孫が生きていく人間と自然という視点からは、予測ができるのではないか。・一方、20世紀のほとんどは、破壊を繰り返してきた。世紀末になって、その過ちに気付く。・未来は「過去」の読み直しの中からしか、見えてこない。・未来とは予測の問題ではなく、未来への関わり方の問題

－ 自然と人間

・例えば「猿、鹿、猪」が畑を荒らす問題は、害獣であるが回りまわって人間の問題でもある。神の違いでもある。自然があるから人間がある。自然は人間に、いい作用もするが、不都合もある。・自分の地域の自然と違う地域の自然(交換可能な自然)⇒自然を委ねる・白神と屋久島の自然を守ればいいのではなく、自分の地域の自然を守ることが大切。

－ 管理する自然から総有する自然

・「世界遺産」という言葉は矛盾に満ちている。世界の自然をどのように管理していくのかということは世界を支配することと同じ。「自然保護」という言葉で管理・支配することになり兼ねない。・すべてのモノを交換可能なモノにしてしまったら大変だ。・一人一人の人間は、消費者であり生産者であり、個人ではないのが、現代経済だ。

・近代国家が出来て自治を失った。人間は誇りを失い、森は国家のモノになってしまった。独立した村や町であれば、我村、我町の自然を収めることは当たり前。それぞれの地域がかけがえのない地域であること。そうでなければ「交換の可能な地域」になってしまう。「かけがえのない」とは「唯一無二のもの」：自然はかけがえのないモノにするのは、その地域、村である。濃密な関係を持ち続けることが可能。来年群馬県で第17回「文化の国体」が



開催される。彼は総合プロデューサー。そのコンセプトは①誰でも参加②建物は建てない③手作りとする(業者に発注しない)・村とは人間の集合体ばかりでなく、自然を含めたのが村だ。・村の森を守る、都会の人と共に守ることを考える時期だ。:総有関係

- 21世紀の自然

・20世紀は「ひとつの秩序に統合する」ことに努力した。結果として自然は破壊され、21世紀は、そのような考え方を打ち破る。

-----  
\* 10月15日

●活動報告

1)マタギ小屋を保存する会:菅原

・和賀山塊のマタギ小屋が、近年秋田森林管理署角館事務所が違法建築物として撤去を決定。

・文化の継承の視点からマタギ小屋の存続を

2)岩木山を考える会

・鱒ヶ沢スキー場に新たに森を開削してスキーコースが造成されている。

・イヌワシ飛翔の森、ニホンザリガニが生息、鳴沢川下流の農業用水不足等の問題があるにも関わらず青森県は許可。裁判で係争中。

・2003年には冬季アジア大会が開催に向けての拡張か。

・事業者(コグド)、県の対応は極めて不誠実。

3)花巻のブナ原生林に守られる市民の会:望月

・奥羽山脈を貫く県道花巻～大曲線を開削。

・現在は、花巻～沢内線が完成したが、奥羽山脈の貫通は阻止したい。

・早池峰(植物のガラパゴス!)では携帯トレキャンペーン

4)岩手自然の会

・ゴルフ場造成が、再び始まる。開発計画の背景は山林が安い

・環境影響評価の無力さ、法的効力

=====

●第2分科会「自然の保護と管理」

(世界遺産地域の管理計画と入山規制、森林生態系保護地域)

=====

座長:鬼頭秀一(話題提供)岡島成行(青森大学教授)、村田孝嗣、吉川隆

保護団体が共同歩調を取るための第一歩にしたい。・自然・人間・文化を一つに考えた管理計画を考えていきたい。この分科会では、大筋な方向性を確認できればと思う。

牧田:昨日の大会で吉川さんの生活を脅かしている実態は、むしろ外からやってくる人たちを排除することが必要ではないか?赤石林道の閉鎖問題は、管理範囲の外の問題で、分けて考えるテーマ。現在の吉川さんの守るべき文化は、産業革命以前に行われた文化。今は異なる時代で、規制して文化・遺産を守ることも必要ではないか。規制と文化維持は相反するテーマだ。

鬼頭:上から規制するのではなく、話し合いで解決を探るべきだ。

庄司:白神問題の解決の原動力は「地元住民の力」だった。現在の林野庁に森を管理する能力も資格も無い。

むりろ食いつぶしてきた放蕩息子だ。森を潰したのは、地域住民ではなく営林署だ。弘青林道を県道にし、赤石橋を立派な2車線にして観光道路の伏線だ。一方、住民である農民・林業・漁民の生活は苦しくなる一方。周辺自治体は白神を食い物にしている。弘青林道を止めることを考えるべきだ。

鬼頭：自然保護団体からありかたを積極的に提案していくべきだ。一方で客を寄せ、一方でコアへの規制を行う。周辺部分を含めて考えるべきだろう。生活者である吉川さんはどうですか？

吉川：世界遺産の枠で白神を考えていない。いつでも、どこでも入れ、何でも採れる白神。洪水で全滅した経験から水に対しては警戒心が強い。大雨の時などは、上流を見に行くことが必要だが、今はそれも出来ない。私の生活は白神だけではなく、農業や鮎釣りなどだ。よそ者が入って来る問題は、現実には経験が無いと難しいだろう。

村田：白神では何が問題なのかを考えてみると、多くの人々と関わりを持っていくことが大事。思考のアプローチの違いで、異なった意見・対立構図が生まれた。「9つの提案」は「白神を守るため」ではなく、「共に生きるために」という視点である。世界遺産になって、現状に即した考えが欠けていたのではないか。入会権や共用林野制度の検討がなされないまま、入山規制が行われた。ゲート問題も地元住民の意見を吸い上げる思考が無かった。(乱暴だった)保護と活用の両面から意見をオープンに議論すべきだ。世界遺産の外側も含めて考えたい。モニタリングとは、どこにどれだけ入って、どの程度荒れ始めているのか等の行為だ。入山許可制度から入山届へ、モニタリングのためのルート指定は、機能していないので止めること等の9項目を提案した。

鬼頭：全く規制か自由かという提案では無いことは分かった

奥村：吉川さんの言う、林道アプローチ・アクセスを止めるという発想は秋田県側でも議論されているが、それは難しいというのが結論。(藤里町)これは意見を聞きたい。管理計画については、あらゆる階層の意見を聞いて決めた積もりだ。2～3年後、地元住民を入れて検討するために自然保護団体の意見を統一するべきだ。

鬼頭：懇話会で林野庁主導でやったことはやったが、地元住民の意見を反映したかは疑問。

岡島：皆の意見は、皆もつとだ。意見は「運用」で何とかなると思った。「9つの提案」は基本的には賛成だ。問題がこれだけ大きいので2～3年を待つ必要はないだろう。人間の性悪説か性善説に立つかで、結果は同じだが「最初に規制ありき」は反対だ。これからの日本は市民が行政を動かす時代だ。林野庁の仕事は市民がある時代も将来来るだろう。役所はやりきれないから「入るな」という。規制ありきで出発してはいけない。地元から「入山規制」の声が上がれば、それでいい。管理計画は、山の現状を知っている人が決めたとはいえない。現実、実際に山に入っている人の意見を反映すべき。2～3年を待たないで、急ぐべき項目は急ぐことだ。実施の運用には2～3年かかるだろう。白神に入って、白神の良さを伝えて欲しい。経験と体力のある人だけが入ることができる山にした。山のガイド等は市民団体が運用の主体になるべきだ。

奥村：6つの採択事項で、いいだろう。

庄司：2～3年待つことなく、即実行すべきだ。

鬼頭：今から動いても2～3年かかるので、動こう。個別の問題を個別に解決していかないと、全体総論での解決は時間がかかるだろう。

奥村：秋田側の「入山遠慮」に関しては今答えを出せないが、議論をするのはやぶさかではない。白神は観光で生きている自治体もある。多くの団体を説得する理論とデータが必要だ。だから2～3年かかるのだ。

吉川：入山遠慮の秋田側から青森に入って岩魚を釣る、山菜を採る奴を締め出して欲しい。それをやらないで、2～3年待てはない。今すぐやって欲しい。

鬼頭：とにかく、すぐに取り組んでいくことを確認事項としたい。

村田：急ぐべきテーマは急ぐべきだ。例えば青秋林道の閉鎖や赤石林道ゲートの移動などは直ぐに動くべきだ。

意見：よそ者を排除があってはならない。自然の大切さを教える、これが自然保護団体の活動

大森：無理に統一しなくてもいいのではないかな。

意見:原生林の無い日本の、規制はあってはならない。「過去を訪ねる」ことは大切だ。

鬼頭:分科会をまとめると、規制の今のやりかた、手続き上での不具合があった。結果的に2~3年かかるが、作業を開始することは合意できたと思う。規制と自由を大上段に構えるのではなく、周辺を含めた議論の出発点としたい。今後の白神を考える上では、白神マスツーリズムではなく、エコツーリズムに導くことが重要だ。環境教育やここでの産業も考え、提言したい。地域をどうしていくか、地域作りも併せて考えていきたい。

牧田:自然保護団体でも「規制」と「自由」を入れた形を考えるべき

鬼頭:その通りだ

### ●大会宣言採択

1. 自然を人間から隔離して保護するのではなく、保全利用しながら自然を大切にすることを培うよう天元する。
2. 自然と地域社会との関わりを修復し、自然と共に生きる地域社会を構築するための努力をすること。
3. 海、川、森を一つの系としてとらえた自然の復元に努めること。
4. 特定地域の自然保存にこだわらず、住宅地から山岳・森林地域まで、連続する一つの生活環境として保全をめざすこと。
5. 公共工事を、公共の福祉と環境保全の観点から見つめ直し、建設な提言をすること。

### ●大会決議「白神2000プラン」:東北自然保護団体連絡会議(提案:高橋淳一)

=承認

1. 世界遺産地域を含め白神山地全体を見通した管理計画とし、自然・人間・文化を一つに考えた管理計画にすること。
2. 世界遺産地域の管理について行政側の組織だけで検討するのではなく、地域住民や自然保護団体など、白神山地の自然に実際に関わってきた人たちを加えた話し合いによって進めること。
3. 地域住民が持っていた入会権は速やかに回復させ、入会の障害となっている奥赤石林道ゲートは現在の位置から、ダム管理道路と奥赤石林道の分岐点に移設すること。
4. 世界遺産地域を保護するために、緩衝地域の周辺で伐採され、その後天然更新にゆだねられている地域の植物等による復元をはかること。
5. 巡視員制度から、レンジャーを養成し、それに代わるとともに、入山者の多くの目でモニタリングする方法をつくること。
6. 現状の入山許可申請制度を指導のゆき届くかたちの入山届出制にし、ビジターセンター等の施設を白神山地と訪問者の交流・学習の場となる拠点とすること。

◎赤石川を守る会 伊藤副会長:青秋林道を止めたが、世界遺産登録では止められた行政が「俺がやった」というのが政治家。これではいけない。

白神における自然保護団体の対立構図は解決し、今後は一体となった管理・運営についての具体的な提案・運動の段階へと移る。

**会費納入のお礼** 5月末日現在で、80名の方に納入いただきました有難うございました。未納の方は宜しく

お願いします。振込先 :02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」 年会費:500円

~~~~~  
達の蓄積があって成り立つもの、自然観察会をとおしてこの蓄積を次世代に伝えられればと願う。■今回は女神山に

係わる内容が多くなった。大半の山は地元の人たちによって守られている。このような善意の人々に、森の生態についての認識が浸透すればと思う。■3月初旬に恒例の高山下りをした。コースは代表が昨春、踏査したエリアで、手つかずの標高差約800m余りのブナ林滑降を満喫することができた。同時に、自然の地形と林相を利用して楽しむ「山スキー」の原点を再認識した。■マンサクが咲き始め、ブナの芽も赤みを帯び、季節は確実に春の装いを整えている。今年もいつものお花畑でいつもの花が咲いてくれることを願う。

◆次回観察会のお知らせ

第42回自然観察会 「西吾妻清掃登山」

日時 8月27日(日)

場 所：西吾妻梵天岩 集合場所： 天元台ロープウェイ白布湯本駅

集合時間：8：00

内 容：天元台スキー場から梵天岩まで登り、ゴミ拾いや誘導ロープのメンテナンスを行います。

参加定員 20名

準備するもの：登山靴、ゴム長靴等、雨具、防寒具、帽子、軍手等、ゴミ袋、昼食

参加費用 保険代300円(当日) 申し込み 8月26日まで

第43回自然観察会 「高倉山観察会」

日時 10月15日(日)

場 所：高倉山 集合場所： 福島市役所信稜支所(福島市笹谷)

集合時間：7：00

内 容：穏やかな山容の吾妻連峰にあって独特の姿を見せる高倉山を訪ね、その成因などを探ります。

参加定員 30名

準備するもの：登山靴等、雨具、防寒具、昼食

参加費用 保険代300円(当日) 申し込み 10月14日まで

これは、1995年の林野庁・吾妻山周辺森林生態系保護地域の設定を受けて1997年に前橋管林局(現関東森林管理局)と秋田管林局(現東北森林管理局)が実施した西吾妻の歩道整備事業に対し、1998年に「高山の原生林を守る会」会員が生態系保護にそぐわない整備の実態を山形県の自然保護市民団体である「吾妻の森と緑のトラスト運動」に連絡、その後、山形県の自然保護団体連名で秋田管林局に公開質問状を提出して、秋田管林局が全面的に欠陥工事の責任を認め、1999年から2001年の3ヵ年計画で実施することとなった「西吾妻の歩道整備に関するモニタリング調査」の調査初年度(1999年)の中間報告会です。

工事に伴う自然破壊が問題となったのは、矢筈山から馬場谷地を経由して西大巖に至る登山道で天元台駐車場から馬場谷地までの歩道整備工事に伴う重機搬入により、登山道沿いの大幅な樹木の伐採が成された上、砂利敷きや、盛土、表土流出、登山道の常識に則しない階段施行、馬場谷地湿原の丸太埋設、排水工事等による湿原破壊でした。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第33号 2000年7月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990(夜間7時~9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(500円)を添えて上記まで

編 集：奥田・佐藤・阿部・丸山

—